

「看護学教育評価検討委員会」

1. 構成員

1) 委員

委員長：小山真理子（日本赤十字広島看護大学）

委員：江川幸二（神戸市看護大学）、亀井智子（聖路加国際大学）、添田啓子（埼玉県立大学）、高橋和子（宮城大学）、田中美恵子（東京女子医科大学）、服部智子（日本赤十字広島看護大学）、平林優子（信州大学）

2) 協力者

なし

2. 趣旨

本委員会は、日本看護系大学協議会（以下 JANPU）の会員校における学士課程教育全体の質向上に向けた取り組みを行う。本年度は、2018年6月に発表した「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」を会員校に広報・普及するための活動を企画・実施した。

3. 活動経過

「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」（以下「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」）の活用に向け、学術集会における交流集会、および委員会独自のワークショップを開催した。また、準備、評価を行うため7回のweb会議を開催した。

【交流集会】

2019年8月4日、日本看護学教育学会第29回学術集会での「指定交流セッション」として、『「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用に向けて一大学における活用状況と活用例一』のテーマで交流集会を開催した（参加者75名）。

＜開催内容＞

日本看護系大学協議会が、2018年6月に発表した「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を看護基礎教育で有効に活用していくための研修会を開催した。内容は、①「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の概要及び活用状況の実態（小山真理子委員長）、②看護学士課程におけるカリキュラムや教育内容を検討する上での活用例（京都橘大学 看護学部 河原宣子氏）、③精神看護学領域での活用例（東京女子医科大学 看護学部 濱田由紀氏）であった。実施後にアンケートを行い、43名から回答を得た（資料1）。

【ワークショップ】

2020年2月16日、聖路加国際大学において『看護学士課程における学生のコアコンピテンシーの育成—「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の有効活用—』のテーマでワークショップを開催した（参加者128名）。

＜開催内容＞

冒頭に「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の概要と活用—JANPU会員校における活用の実態調査結果をふまえて—についての報告を小山真理子委員長より行い、その後「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の各大学での活用例として、①大学全体での活用（千葉県立保健医療大学 健康科学部看護学科 河部房子氏）、②基礎看護学での活用（日本赤十字広島看護大学 川西美佐氏）、③精神看護学での活用（昭和大学 保健医療学部看護学科 榎田めぐみ氏）の報告を行った。その報告を

踏まえ、参加者が希望した領域に分かれて少人数でグループワークを行い、それぞれの大学でコアコンピテンシーと卒業時到達目標をどのように活用しているか、今後どのように活用できるかの可能性について意見交換を行った。その後、全体会として、各グループワークで話し合われた内容を発表してもらい、参加者全体で共有した。各グループワークの内容は、次に示す通りである。実施後にアンケートを行い、114名から回答を得た（資料2）。

<ワークショップ グループワーク内容>

現在の活用状況として、表1に示す内容等が話し合われた。

表1 参加大学における「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の現在の活用状況

	活用内容
ディプロマポリシーの評価・見直し・活用の検討	<p>D Pの構成要素とコンピテンシーをすり合わせる。</p> <p>全ての科目を評価で全教科、全科目でチェック、D Pの評価をしている。</p> <p>D Pのルーブリックの作成に向けて、各領域でコアコンピテンシーのどこを教育しているのか確認している。</p>
カリキュラム・シラバスとの整合性の確認	<p>コンピテンシーの項目をカリキュラムの漏れがないかチェックリストとして使用。既存のものとの照合している。</p> <p>どの科目でどこをおさえているのかを確認した。</p> <p>コアコンピテンシーを活用しながらカリキュラムを評価した。</p>
大学の特色・地域の特色との整合性の検討	<p>大学の特色にC P、D Pがあっているかを確認した。</p> <p>大学の理念(建学の精神)から考え、その上でコンピテンシーと照合。大学の地域による存続の意義も合わせて考える。</p>
カリキュラム・シラバスへの反映	<p>教務委員でチェック項目(各科目の目標とコンピテンシー)を作り、各領域でチェックをしていった。カリキュラムマップも示されたことで、自分の領域の目指すところは何かわかりやすかった。</p>
学生が活用できるように示す	<p>1年のガイダンスで学生に提示している。</p> <p>コアコンピテンシーを学生に示す(実習目標、実習評価の中にも入れる)。</p> <p>学生のチェックは1年次では難しい内容もあるため学年毎に整理している。</p>
学生の能力積み上げの評価に使用している	<p>卒業時到達目標を評価表として作成している。</p> <p>卒業到達度評価として、学生の自己評価に用いている(学年進行とともに)。就職後、3か月、6か月、1年にアンケート調査をしている。</p> <p>評価は学生にも返している。</p>
実習に活用している	<p>WebでD Pの目標ごとの達成度を学生自身で年度末に評価している。授業評価とD P評価の両方を行っている。学生の意識付けにもつながる。</p> <p>実習の終了時毎に実践能力を評価している。評価表としての活用している。</p> <p>実習時の到達目標の参考にしている。</p>
教員が理解できるようにする取り組み	<p>月1回の学習会を始めたばかりである。</p> <p>全教員でフリーディスカッションしている(F Dなどで)。</p>
他領域とのすり合わせを行っている	<p>新カリキュラムに向け統合できる科目を確認するうえで、コンピテンシーを領域を超えて共有した。領域間同士のつながりができるような話し合いに活かした。</p> <p>分野間のすり合わせを行った。</p>

※D P:ディプロマポリシー C P:カリキュラムポリシー

今後の活用として、表2に示す内容等が話し合われた。

表2 参加大学における「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の今後の活用

	今後の活用内容
大学のディプロマポリシーに合わせてコアコンピテンシーを定めていく	コンピテンシーのモデルを大学、学科に合わせて表現する。学生にわかる表現にする。大学独自のカリキュラム・科目を作る。
コアコンピテンシーをカリキュラムに活かす	大学の独自性(ディプロマポリシー)が大切でコアコンピテンシーは解釈であり、どこまで取り入れるかは各大学できめればいいのかと理解した。 コアコンピテンシーをシラバスに落とし込む。
目標達成のための枠組みを作る	基礎としてコンピテンシーをどのように活用していくかを検討を重ねていくことを繰り返す。 現行の講義、演習、実習と照らし合わせて使っていきたい。 何年生で目標達成させるかという、マトリックスを作成する。
学生がコアコンピテンシーを意味づけられる見える化を図る	整合性が見える対応表等を作成し、位置づけ示すことで共通理解をする。 カリキュラムマップを作成し、担当する教員・ディプロマポリシーの積み上げが見えるようなものにする。 コンピテンシーを用いて学生の変化を見せる。
領域間で学ばせていることの共有を行う	自分のなりたい姿や求められていること、学生に明確にすることで目指す方向性を早期(1年生入学時)から明らかにしてあげる、提示してあげる。 ループリックを活用していくと、学生自身が評価しながら主体的に進めていくことができる。 コアコンピテンシーを指標にして各領域でどう教えられるかを全体で共有する。
領域間で共通する部分を整理し明確にする	領域間との連携、学年の積み重ねがわかるようにしていく(コアコンピテンシーの活用)。 授業公開を行うことの利点を活用する。教える内容の重複、抜けがないようにしていく。 領域を超えて共通する基礎的な部分で同じところを明確にして評価する。
シミュレーションを用いてコアコンピテンシーを高めたい	臨床判断能力を高める為、臨床判断能力を具体的にどう表現するか、シミュレーションの活用など検討していく。 コアコンピテンシーのⅡ群、Ⅲ群に該当する技術評価は、各技術評価のループリックを作成し、事例を出す。倫理、声掛けなど、評価項目を設ける。
教員の教育に活用する	教員相互評価に、コンピテンシーを活用する。 フラットに皆で話し合えるようFDにいれ、教員の教育に活用する。

4. 今後の課題

- 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の看護学士課程教育への活用に向けた「交流集会」と「ワークショップ」を行い、アンケート結果(資料)から次のような今後の課題が明らかになった。
- (1) 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」をカリキュラムや教育内容の評価に他大学でどのように活用をしているのか、多様な具体例を示す支援ガイドが必要である。その内容には、各大学の特徴を踏まえたDP、CP等との関係性、具体的なカリキュラムやシラバスとの整合性のもたせ方や反映の方法、教科の評価や実習との関係性、そして各教員がこれを理解して活用するためのFD等といった具体的な活用方法を示唆するものが望まれている。
 - (2) 学生に「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を示す取り組みの実際や、他大学での現状や工夫内容を共有する場がJANPUに求められる。
 - (3) 教員間での共通認識として、「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を活用する具体的な方法を知りたいというニーズがある。

5. 資料

参加者のアンケート結果

【資料1】第29回日本看護学教育学会学術集会での「指定交流セッション」(2019年8月4日)実施後のアンケート結果

交流セッション参加者75名のうち43名(回収率57%)からアンケートへの協力があった。

1) アンケート回答者の属性

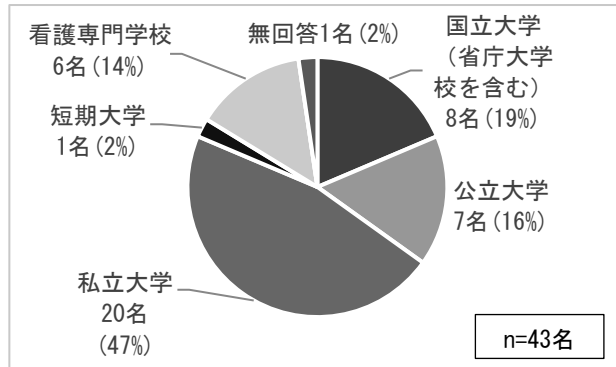


図1. 指定交流セッション参加者 (所属別)

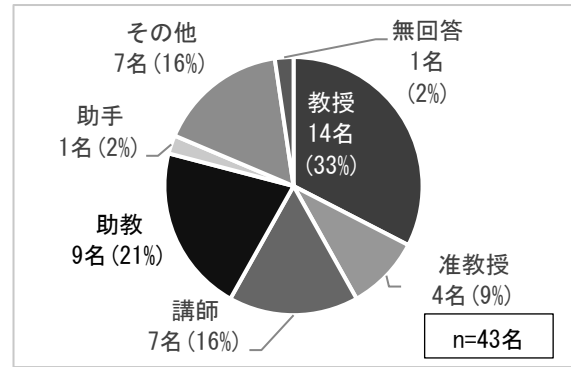


図2. 指定交流セッション参加者 (職位別)

2) 本企画は「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用への参考となったか

表1. 本企画の「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」活用に向けての参考の程度

参考の程度	回答数 (%)	あまり参考にならなかった理由
非常に参考になった	17 (40%)	<ul style="list-style-type: none"> どの段階で活用した評価を行うか知りたい ディプロマポリシーとの関連を知りたい 看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関連を知りたい
まあ参考になった	24 (56%)	
あまり参考にならなかった	2 (5%)	
参考にならなかった	0	

3) 「支援ガイド」に含めて欲しいと思う内容について

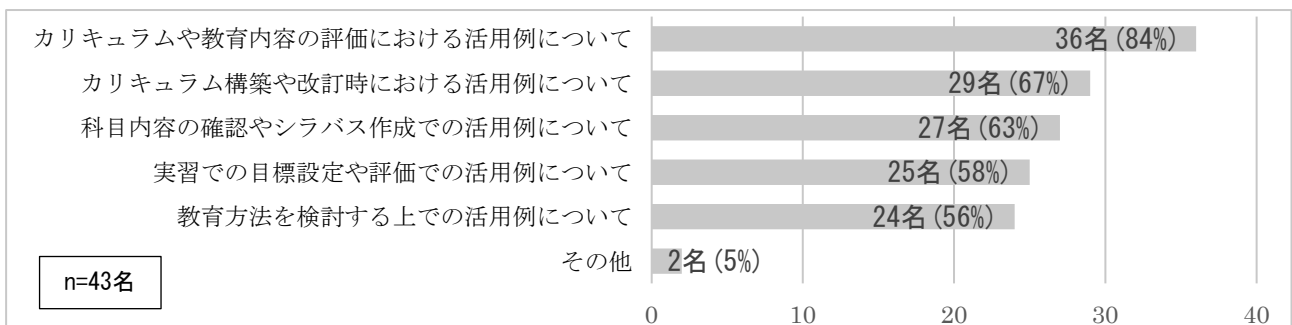


図3. 「支援ガイド」に含めて欲しいと思う内容について (複数回答)

4) 「支援ガイド」作成に向けた意見・希望 (自由記述 抜粋)

<カリキュラム作成時の具体的内容を含めて欲しい>

- ・カリキュラムへの具体的な導入のガイドを含めて欲しい (3名)
- ・学生と教員の評価の違いをどうするか
- ・学生がどう成長したか、到達したか知りたい

<領域間の調整内容を含めて欲しい>

- ・それぞれの内容・項目をどの領域がメインとして担当するのか、重なり・抜けを防ぐためのヒント
- ・領域横断すると、どう評価するかわからない

<カリキュラムへの活用時の検討例を含めて欲しい>

- ・カリキュラム構築時の活用例に、全教員（若手教員含めて）で検討する必要性を示して頂きたい
- ・（大学教員として）教育歴が浅い助教や講師でも、関わられるような取り組み例を知りたい

<支援ガイド運用時の要望>

- ・質問票の提示と使用許可が欲しい
- ・「何に活用できるのか」「どう活用できるのか」単なるチェックリストにならないようにしたい
- ・How to のようなものではないところの支援ガイドの作成を期待する

【資料2】看護学教育評価検討委員会企画ワークショップ（2020年2月16日）

実施後のアンケート結果

ワークショップ参加者 128 名のうち 114 名（回収率 89%）からアンケートへの協力があつた。

1) アンケート回答者の属性

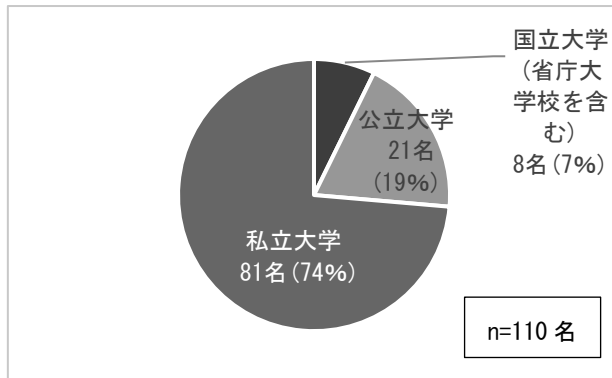


図1. ワークショップ参加者（所属別）

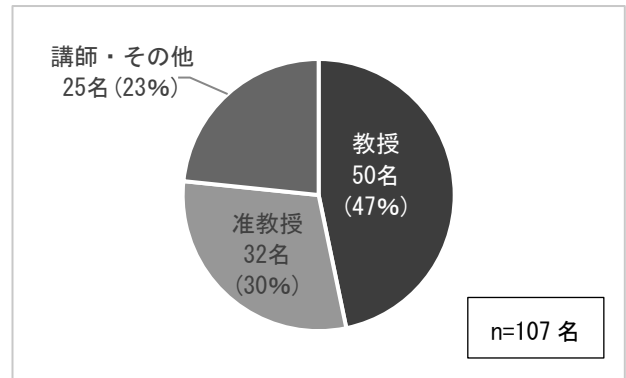


図2. ワークショップ参加者（職位別）

2) 本日の企画は「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の理解や活用の上で参考になったか

■ 概要と活用

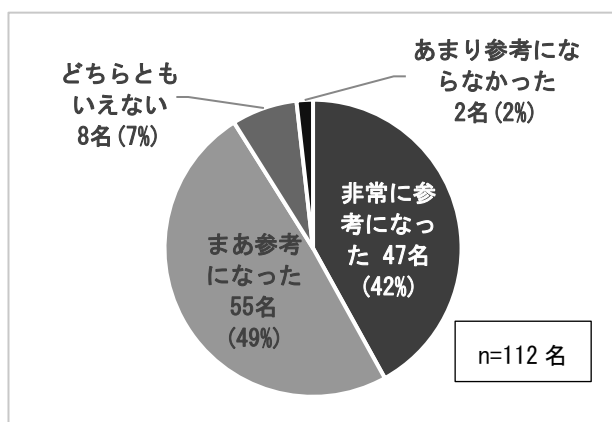


図3. 「概要と活用」の参考の程度

■ 大学での活用例

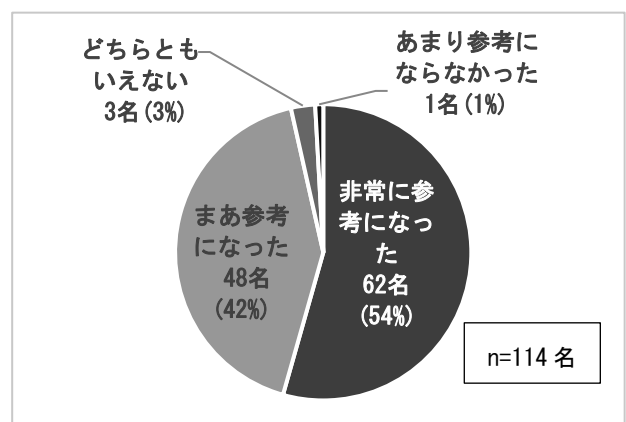


図4. 「大学での活用例」の参考の程度

■ グループワークでの意見交換

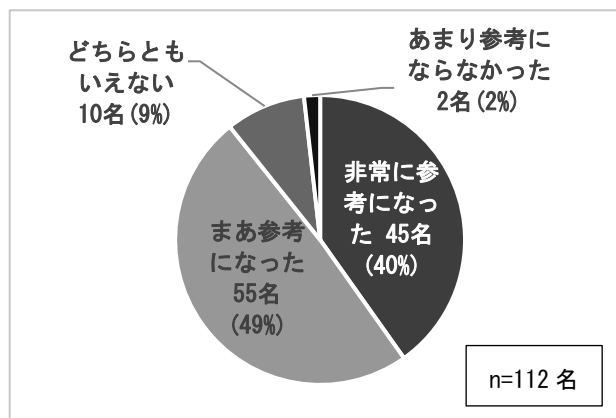


図5. 「グループ意見交換」の参考の程度

■ グループワークの成果の全体共有

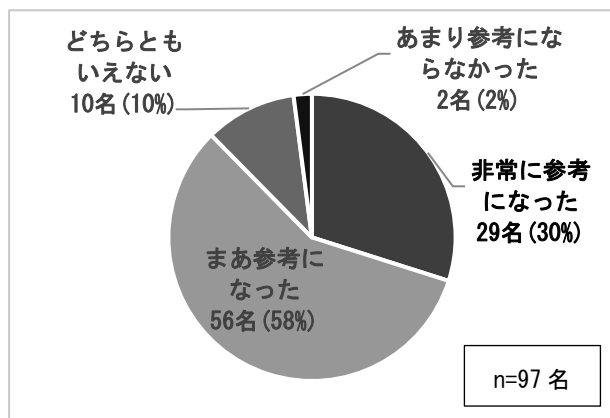


図6. 「グループワークの全体共有」の参考の程度

3) 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」について、さらに知りたい内容

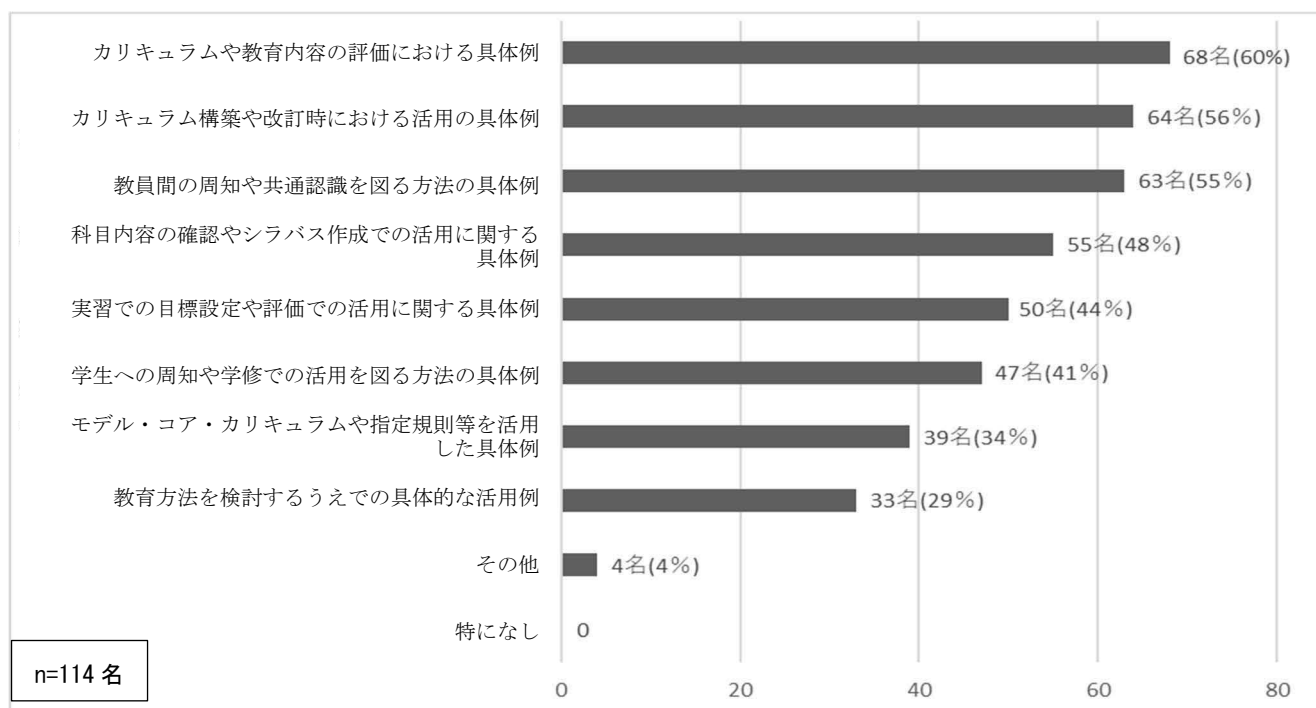


図7. 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」に関して追加で知りたい内容

4) 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の現在の活用方法(自由記述 抜粋)

現在の活用方法

- ・ 学生へのアンケート(卒業時到達目標の達成度)を実施しカリキュラム改訂の検討に活用
- ・ カリキュラム評価に活用
- ・ ディプロマポリシーを考える時の資料
- ・ カリキュラムがコアコンピテンシーを網羅しているか確認
- ・ ディプロマポリシーと組み合わせた一覧表を作成し科目を検討
- ・ アセスメントポリシーの指標検討に活用

5) 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の今後の活用予定(自由記述 抜粋)

今後の活用予定

- ・ポートフォリオ改訂に合わせて検討
 - ・大学全体での共通認識
 - ・カリキュラムとコアコンピテンシーの整合性を確認
 - ・モデル・コア・カリキュラムとの違いを説明予定
 - ・学生の自己評価と、卒業生を受け入れた施設(就職先)に同じ項目で評価を依頼
-